

# 砂宇宙を生きる



時代の変遷に伴い、より小さく分断され、「砂宇宙」化した社会の中で、人々は「個」として生きる術を見いだしてきた。だが昨年は、全く別の出来事で、否応なしに分断が進んだ。新型コロナウイルスの感染拡大。ソーシャルディスタンスという耳慣れぬ言葉が一般化し、不要不急な外出の自粛も求められた。人々の心は内向きとなり、より小さな世界に入り込んでしまったようにも映る。今年に入ってもコロナ禍収束の兆しは見えない。

その中で、「今できること」は、今しかできないことだ」と発想を逆転させ、チャレンジを続け人たちがいた。女優で歌手の小泉今日子さんもその一人。昨年10月に3週間、東京・下北沢の「本多劇場」で、コロナ対策に細心の注意を払いながら日替わりのイベントを開催した。

本来は自身でプロデュースし、出演もする芝居「ピエタ」を上演する予定だった。だが、コロナ禍で中止に。「そのままでは劇場も打撃を受ける。自分に何ができるのかと考えた時に浮かんだのが、仲間と手をつなぐことでした」。俳優・沢村貞子が残したエッセーの朗読会から、着席のままクラブミュージックを楽しむ会や、「永遠の西城秀樹を語りあうタベ」まで。小泉さんが新たに企画したものもあれば、別の場所で開催が中止された企画もあった。演劇や映画、音楽などに関わ

## 今しかできないこと

人の苦境は、文化庁が昨秋行ったアンケートからも浮かび上がる。約4割が「文化芸術活動の収入がほぼ0%」と回答。そんな困難を前に立ち上がった理由を「アイドルだった私は、映画にも音楽にも知り合いが多かったから」と言う。「誰かが立ち上げれば、後に続く人も出る。成功例を積み上げることが大事」。その信念が原動力だった。

### \* 危機を逆手に

毎年約600万人が訪れるカ

ンボジアの世界遺産・アンコール遺跡でも、今しかできない取り組みが進む。コロナ禍で観光客がいなくなったことを逆手に取り、周囲を整備しているのだ。遺跡公園はこれまで、大型バスや三輪タクシーがひっきりなしに行き交い、二酸化炭素の排出量増加や震動による石造建造物の劣化など「観光公害」に悩まされてきた。その改善策として、政府機関が自転車で公園内を周遊できるサイクリングロードを設置。アンコール・ワット参道脇にあったレストランや土産物店も、地元住民らの了解を得た上で、約1キロ離れた大型駐

車場隣接地に移転した。海外客向けのホテルは長期閉鎖され、倒産した土産物店も少なくないが、一日も早いコロナ禍の収束を願い、整備は続けられた。「参道周辺の景観が改善され、遺跡を見たい観光客と商売に励む住民との協調的な関係も期待できる『WINWIN』の取り組みだ」。国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)・ノンペン事務所で世界遺産保護などに携わる長岡正哲さんは評価する。

### \* 分断防ぎツール

世界中の誰もが災いの当事者

※山本太郎『疫病と人類』(朝日新書)などを参照して作成

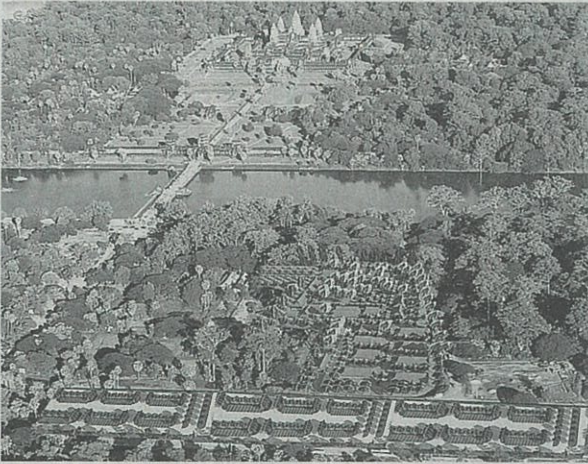
### 主な感染症の流行の歴史

6世紀頃	仏教伝来とともに天然痘が大陸から日本に流入
6~8世紀	東ローマ帝国がペスト大流行を契機に衰退
743年	聖武天皇が天然痘の収束を願い、大仏建立の詔
14世紀	貿易拡大などにより、ペストが欧州で大流行。人口の4分の1~3分の1もの死者を出す
16世紀	スペインによる新大陸の発見・征服で天然痘などが持ち込まれ、アステカ・インカ両帝国衰退
19世紀	インドの風土病・コレラが英国など欧州に拡大。西洋船の来航を機に幕末の日本でも大流行
1918年	米国で広がったスペイン風邪が、第1次世界大戦の戦線拡大によって世界中で流行
2020年	新型コロナウイルスの「パンデミック」

# コロナ禍に誰かにつながる



芝居「ピエタ」の公演は中止されたが、脚本を小泉さんら女優3人とバイオリン奏者の計4人だけが出演する朗読劇に変更し、上演された小泉さんの個人事務所「明後日」提供



コロナ禍を機に、参道脇の店舗が移転されたアンコール考古遺跡公園。中央右下寄りにある建物に移転した店が入る ©カンボジア文化芸術省アプサラ機構



コロナ禍前のアンコール・ワットにぎわい。年間約600万人が訪れていたが、昨年4~7月は対前年比99%減となった ©ユネスコ

となり、困窮する人を助けることもままならない。そんな事態は100年前のスペイン風邪の世界的流行以来だろう。だが、さらに長いスパンでみれば、感染症の歴史は社会の「分断」の歴史でもあった。

中世ヨーロッパのペスト流行時は、ユダヤ人が毒を井戸に投げ入れたことが病の原因だという風評で迫害された。幕末の日本でコレラが流行した際も、西洋から持ち込まれた疫病として、攘夷運動が活発化した。「自分とは違う人を排除しよう」という行為は、災害や感染症流行といった非日常状況のなかで、日常のように行われてきた。

「若い学生の貴重な発表機会を奪ってはいけない。ITの専門家の我々が率先して行わなければならない」と、実行委員長の合田和生・東大准教授。他の学会が中止される中でこの開催で、このノウハウは外部にも提供され、大学を中心に遠隔授業などで利用されている。国立情報学研究所の喜連川優所長は、引きこもりがちだった子供が遠隔授業だと積極的に参加してくれる、との報告を受けた。「物理的な接触がなくなると、サイバー空間を通して気持ちのやりとりができる。思いもしなかったITの使い道を、コロナをきっかけに見つけられた」

ただ、情報技術はあくまで道具であり、目的ではない。山本教授は「社会的距離を取ることにも必要だが、人間は他人と接することで共感を育んできた。ITを駆使した『新しい近接性』をどう構築するかが今後の課題だ」と話す。

### \* 「利他的に」

小泉さんの企画やアンコール遺跡での取り組みも、オンラインで発信された。成功例は着実に増え、共有されつつある。しかし、コロナという「目に見えないもの」の前では、人は時に、目に映る誰かを差別し、疎外しそうになる。それをどう防ぐか。そんな時、今回の取り組みを通して、小泉さんが気づいた思いが役に立つのかもしれない。

「みんなの願いをかなえようと動いたら、それが私の財産になったようにも感じたんです」利他的に生きる……。それがコロナ後の世界の新な羅針盤になればいい。(文化部 多可政史 (おわり))